

歴史博物館論のための予察

矢 島 國 雄*

1 はじめに

日本の博物館の総数は1993年3月現在で3105館である(日本博物館協会調べ)。そのうち1368館が歴史系博物館とされる。また、多くの場合その一部や大部分で歴史を扱っている総合博物館136館、郷土博物館の458館も歴史系博物館として数えることができよう。これらを加えると実に博物館総数の63%を占めている。

歴史博物館といい、歴史系博物館というこの用語の問題を詮索し出すのは余り生産的な議論ではないような気もするが、歴史系博物館というある種の曖昧さの陰に、多くの歴史博物館が隠れてしまっているような気もしないではない。

では、いったい歴史博物館とはどのようなものとして定義されるのであり、その具体的な姿はどのようなものなのであろうか。そして、そのあるべき姿はどのようなものが考えられるのであろうか。そもそも、歴史博物館という概念はどこで生まれてきたものなのであろうか。『歴史博物館』と『歴史系博物館』という用語の意味を考えているうちにこうした疑問が次々と湧いてきた。また、『歴史展示』というものについても、もう一度その概念を明確にする必要があるものとも思った。

こうした課題に関する論議を、未だ全面的に展開する用意はないが、本稿では、今後の

考察の展開を予測しつつ、いくつかの問題点についての考えを述べておきたい。

2 歴史資料

博物館は資料群(コレクション)なくしては成立しない。歴史博物館の収集する資料群は歴史資料ということになる。では、歴史資料とはどのようなものなのだろうと考える時、歴史を考え、語るために役立つものはすべて歴史資料ということであり、人類の過去の生活・文化・政治・経済などにかかわるすべての物証が歴史資料ということになる。

つまり、資料そのもの、objectそのものが何であるかの問題ではなく、それによって歴史を語ることを考えられるものはすべて歴史資料といえるということになる。実際には歴史叙述であるような展示をしていなくても、その資料群が歴史を語ることもできるような性質のものであると判断されれば、そうした資料群を持っている博物館は、ある意味で歴史系博物館という範疇で考えられるということになる場合があるのだろう。これが、ある種の曖昧さや混乱を生んでいるとも考えられる。

しかしながら、歴史資料かどうかは、その資料の性質にもよるが、最終的には、その扱い方、つまりどのような視点から調査研究し、収集され、どのような歴史を語るために展示

* 明治大学文学部教授

されるかという問題によって決定されるものであるともいえる。

美術工芸品も生活財も、そこに美を觀ようとすれば美術資料であり、そこに歴史的な人間の文化を見ようとすれば歴史資料であるといえれば分かりやすいであろうか。

とするならば、既に資料の収集の段階において、ある種の選択や価値判断が不可避免的に伴うといつてよかろう。あらゆるものが歴史資料となるが、それはある明確な価値基準によって選択された意味のあるかたまりである場合に有効な資料群となるのであり、あらゆるものが歴史資料であるなら、取りあえず何でも集めておけばそれが歴史資料となるとは言えないであろう。ところが、事柄を複雑にしているのは、このように、とりあえず、あるいは手当たり次第集められた資料群は、しばしばどうしようもない資料群でありながら、その中にある価値基準が用意されれば、極めて有効な歴史資料としての意味を持つようなかたまりが入っている場合も決して少なくないことである。実に雑多な各種の歴史・民俗資料が、相当に雑然としかも所狭しと並べられた郷土資料館などが我々の目を引くのは、その展示や雰囲気がいいからではなく、そこに見る資料群の中にある光を見いだすからに他ならないのである。すなわち、言葉を換えて言えば、実際の歴史展示ばかりでなく資料の収集段階から既に、そこにはある史観が存在するといえるのである。

このゆえにこそ、学芸員はその専門的知識と見識を問われることになるのであり、博物館の利用者、つまり社会に対して、その責任を負うことになるのである。

ここまでは、これまでも繰り返し言われている博物館資料論の焼き直しであるといつてよい。ここからさらにもう一步突っ込んで、博物館における歴史資料とは何かを追求することが急務ではなかろうか。それには、個々具体的な object を取り上げ、検討されねばな

らない。

例えば、歴史資料として最も一般的な文書資料を考えてみると、抽象的な関係そのものが主題となる領域の歴史にとっては、最も直接的な資料といえるものであるが、そこに書かれた内容そのものは、歴史資料としての価値は高いとはいえ、実際の展示による歴史叙述に当たっては、多くの場合、象徴的な展示資料以上の意義を持ちにくい場合が多い。一葉の文書ならまだしも、長巻のもの、冊子形態のものでは、開いて示すことのできる部分は限られたものでしかなく、往々にしてその文字はある種の訓練を積まなくては現代人には読めないものであったり、そもそも展示という状況を予定して書かれているわけではないために、離れたところからでは読み取れないという問題も起こる。つまり、文書の内容そのものを示すには、解説パネルなどの補助なくして、十分にその内容を伝えることは一般に至難である資料なのである。では文書資料は展示には不要であるのか。文書資料に代わってどのような資料がその内容を伝えるための展示資料となり得るのか。こういった問題は決して理論的に詰められてはいないのが現状だろう。

また、近世後期から現代に及ぶ民俗資料といわれる一群の生活用具や労働用具なども、往々にしてその収集の切り口は、歴史資料としての収集ではなく、民俗資料としての収集が多く、実際の複合的な生活のある時間断面できちんと示すことができるか、ある生産過程の歴史的な評価を示すような展示に応えられるのかといわれれば、問題の多い場合が多々見受けられる。古くから言われている民俗学と歴史学のそれぞれの立脚点と資料に対する考え方の違いに遡って、博物館資料、歴史資料としての民俗資料論を再検討することが課題なのであろう。

さらに、複製資料や復原資料をどのように歴史資料として位置付けるのか、博物館資料

として位置付けるのかという問題についても、未だ十分な論議は尽くされているようには思われない。

博物館資料論としての歴史資料論もこうしてみると、まだまだ探究されなければならない分野を大きく残している。

3 歴史展示

博物館の展示というものが、〈もの〉の有為な配列によって、ある〈こと〉、すなわち思想・概念を伝達することであるとすれば、歴史展示は、〈もの〉によって、歴史を叙述することであると言い替えられる。

つまり、歴史展示というのは、〈もの〉の内包する諸情報から、歴史叙述に必要な情報を主として視覚によって取り出させ、構成させて歴史叙述として受け止めさせることが求められるといえる。そして、〈もの〉をどう記号化し、その記号化した〈もの〉をどう関係づけさせ、メッセージを構成させるかが、展示の技術的側面ということになる。

ところで、この博物館の展示という伝達形式・表現形式に対して、上述のようなことを期待するのは余りにも楽観に過ぎるという批判は古くから提起されている。ユージェニオ・ドナートによれば、フロベールの『ブヴァールとベキュシェ』では、博物館の展示について、次のように述べられていると要約されるという。

博物館が展示する事物たちは、それらがどうにかこうにかある一貫した表現／表象的な宇宙を形づくるという虚構によってのみ支えられている。全体性に対して断片を置き、事物をラベルに、事物の連続体をラベルの連続体に置き換える、繰り返し行われるメトニミック（換喩的）な転置、それがなお或る非言語的な一宇宙に対して或る程度十分な表現／表象を与え得るというのがその虚構の実態である。そうした虚構は、秩序づけと

分類、つまり断片の空間的並置が、そのまま世界に対する或る表現／表象的な理解へと結びつくとする観念への無批判的な信頼の所産でしかない。この虚構がもし消えてしまえば、（中略）意味も価値もない事実の断片どもの堆積しかそこには残っていないことになる。（高山宏訳）

このような展示という表現形式・伝達形態に対する根源的とも言える批判に、私たちはどのように反論できるのであろうか。私たちが行っている展示、そして目指している展示は、断片の空間的並置が、そのまま世界に対するある表象的な理解へと結びつくというような安易な観念の所産ではなく、また実際に提示している展示に無批判的な信頼を寄せているわけでもない主張できるのであろうか。

とりわけ、歴史展示においては、しばしば〈もの〉から離れたいわば抽象的な関係そのものが主題となるような領域でもあり、〈もの〉の配列は、単なる事実の断片の堆積しか示してはいないという結果になってしまっていないかどうか、改めて点検し、分析し、評価してみる必要がある。

4 歴史博物館という概念

歴史資料が上述のようなものなら、歴史博物館かどうかは、歴史を展示によって叙述することを目指した博物館であるかどうか、そのために歴史資料を調査研究し、収集・保存する博物館であるかどうかにあるといつてよからう。

そして、原理的に言えば、歴史展示には歴史観、史観は不可避である。史観のない歴史展示はあり得ない。展示のシナリオの作成、資料の選択自体がすでに一定の価値観に立脚する以上、それは史観の表明であるといえる。ただし、十分練られていない、価値基準のあいまいな史観、視点の一貫しない史観による展示は有り得るし、実際にある。

歴史展示を行う歴史博物館を標榜する以

上、史観の問題は避けて通れない。公平、客観的な史観なるものも、極めて特殊な意味でしか存在し得ない。

この史観の問題、歴史資料の問題を考える時、歴史博物館というものがいつどのような形でできあがってきたのかということは大変重要なことであるという気がする。

歴史叙述そのものは遠いギリシャ世界から厳然として存在し、歴史学なる研究領域もその成立は古い。しかも、ここで言う歴史は修辭としての歴史、つまり叙述されることによって成立するものなのである。

ところで、この歴史が人々にとって、さらには為政者にとっても極めて重要なものとして認識されるようになるのは、国家とか国民というものが成立してからのことではないのだろうか。さらには、その国家、国民を構成する民族が強く意識されるようになってからなのではあるまいか。つまりは19世紀後半に本格化する近代世界の枠組みが、歴史というものに対する意識を強烈に刺激したのではあるまいか。

そう考え、近代博物館の発祥地である英仏など西ヨーロッパを見ると、意外なことに明確に歴史博物館と定義できるものは比較的少ない。つまり、既にある種の安定した国が形成され、市民意識が明確に成立していた地域では、歴史博物館は必ずしも真っ先に求められた博物館ではないといえそうである。博物館の歴史を見ても、明確な意味での歴史博物館というものは、どうやら後発的な博物館のように思える。ところが、北欧、ロシア、東欧を始め、アメリカ、アジア、アフリカなど、18世紀後半に英仏で成立した近代博物館という概念を遅れて受け入れた地域には、実に数多くの歴史博物館・歴史系博物館を見いだすことができる。これらの国々が国家と国民、民族の自治を獲得していく過程には複雑な歴史があったことを我々は知っている。そうした国々で、歴史博物館が目だった存在である

という現象は実に示唆的である。

確かに今日、大英博物館には歴史展示がまったくないわけではないが、その創設から19世紀の後半までは、自国の古代・中世を扱う部門すら置かれておらず、国内の考古・民俗・歴史資料に対する関心もどちらかといえれば希薄で、いわんや自国の歴史を展示するという考え方も明確には認められない。今日でも、国家的な文化的遺産(cultural property／heritage)という観点、つまりは美術的、文化史的観点からしかくもの>を見ていない傾向が強いとは言えまいか。

これに対して、19世紀後半以降に大いに民族意識、国民意識を強く掲げて打ち出す、英仏を取り巻くヨーロッパ社会(周縁国家群)では、歴史に対する関心は比較的高く、しかもそれを見せるための博物館を創設していくというかなり際立った動向が見てとれるような気がする。周縁ゆえの意識形成といっては誤りであろうか。この見方が正しいとすれば、20世紀における歴史博物館の世界的拡大と増加は、同じ意識形成が、欧米の外の周縁国家群へと拡大していったことと照応するものであることを示すであろう。

北欧の民俗や歴史の博物館、ドイツにおける郷土博物館、共産圏諸国に見られた革命博物館、アジア、アフリカの独立記念博物館などの設立年、それぞれの掲げた博物館理念、実際の活動実態を十分検討してみれば、こうした結論が出るのではなかろうかと予測している。

わが国の状況もまさに周縁の一員として例外ではないようだ。国立の博物館が辿った歴史は、殖産興業・富国強兵から一転して国家的・民族的ナショナリズムを強く打ち出した歴史の誇示、特有の文化遺産の誇示へと進んでいる。さらに戦後の1960年代末以来、やはり自らの新たな歴史的位置を確かにしておきたいという強い願望が、明治百年という極めて政治的な契機に乗って、全国に歴史系博物

館を次々に作らせた原動力となっていたのではなかろうかと思う。

ところで、諸外国の歴史博物館には、それぞれかなり際立った特徴が見てとれそうである。特に近年際立っているのは、歴史的な遺跡や地域、街区などを保存・修復し、そこでの当時の生活や文化を丁寧に再現し、来館者をその中にとり込んでしまう形のものが著しく増加しつつあることである。

一方、わが国では各都道府県はもとより市町村の歴史博物館まで、かなり無理をしながらも相当綿密に通史を扱う博物館が一般的である。諸外国の国立などの中央的な歴史博物館が自国の通史を扱っていないとは言わないが、それぞれの地域博物館などは、必ずしも無理な通史展示にこだわっている様にも見えない（もっとも、筆者の収集した情報量とその範囲は高が知れているので、余り大きな声で言うわけには行かないが）。この辺にも、それぞれの国の歴史というものに対する意識の持ち方や、それを社会的にどのように博物館として結実させていくかという考え方の違い

が見てとれそうな課題である。

5 むすびにかえて

歴史系博物館という、ある種の曖昧な概念で世界の博物館を見れば、なるほど相当多数の博物館が歴史系博物館と分類されそうである。考古学博物館、史跡博物館、民俗博物館などのすべてを包摂することになるし、各種の記念博物館や、はては個人の記念館まで歴史系博物館として括ることができてしまいそうである。このこと自体は取り立てて問題ではないとしても、その中で、歴史を展示する、展示によって歴史叙述をする歴史博物館というものが、次第に臃げなものになってしまうことは、博物館学的にはひとつの課題とせざるを得ない問題をはらんでいるといえよう。

本稿は、思いつくまま歴史博物館をめぐる検討課題を挙げたに過ぎず、その調査、分析、検討はこれからのことである。多くの方々とこの問題をめぐって意見交換をする機会を持ちたいと考え、敢えて駄文を弄した次第である。

On the Definition of History Museum.

YAJIMA Kunio

There are so many historical museums in Japan, and the total number of them should be over 1,900. Almost of them should say that they would exhibit a history of their concern. But I have a doubt about these exhibitions whether they are surely describing a history, or merely exhibiting historical objects.

What is the idea and character of the history museum? This paper would picked up some problems on about the definition of history museum.

First, I should think about the historical materials as the objective specimens for museum's exhibitions. Probably, all objects of the past might be historical materials. But, do we know what objects would be appropriate for exhibiting history? The exhibition of history would be describing history by the arrangement of historical objects as a symbols or signs. It would not be merely displaying the historical objects.

Next, I have an interest when and where the history museum started. I have not yet firm conclusion, but I suppose that the idea of history museum would make up rather in the marginal states of western Europe. It should be concern with coming into existence of nation and national identity establishing modern states and world systems.